

日本赤十字社の感染症の治療と予防の歴史

世界の感染症

735-737

天然痘が日本で大流行
・東大寺の大仏は鎮静を願って建立された

1918-19

スペイン風邪が世界的に大流行

2002-03

SARSがアジアを中心に広がる(注1)

2009

新型インフルエンザが広がる

2012

MERSが広がる(注2)

2014-16

エボラ出血熱がアジアから広がる

2015-

MERSが再び広がる

2019-

新型コロナウイルス感染症が拡散中

日本赤十字社の感染症の治療と予防

1877

西南戦争でのコレラ予防▶①

1911

結核撲滅事業の本格化▶②

1921

ポーランド孤児救護での腸チフスの治療▶③

1923

関東大震災での感染症対策▶④

1941-45

戦時下での感染症との闘い▶⑤

1983

たすけあいのところで海外の感染症対策を支援
・1983(昭和58)年、日赤はNHKと共催で第1回「NHK海外たすけあい」キャンペーンを実施。全国規模の募金活動による画期的な国際支援に踏み出した。毎年継続して現在に至る。



①西南戦争でのコレラ予防(佐野常民の電報)

信との空達の西始十博
し現清氣に資南者字愛
た地潔の奔金戦・社社
にに清走や争佐母(現
電注浄。物で野体(日
報意、ま資救常)日
を!衣たの護民の本
発一服一調へは創赤



②大阪支部病院結核療養病棟

展の時ま全結運本明日
し赤のた国核動格治赤
た十結伊各専に的4は
。字核達地門取な41
病病ににのり結~9
院院も開病組核年1
にが。設院ん撰か1
発今当。をだ滅らへ



③食堂でのポーランド孤児(絵葉書)

ドに取り孤り寒ドをロ
に全容を見残のの失シ
婦員。日二さ子つア
国がそ赤千れば供た革
した。ボしが三たりたボ命
。ラ無本人そにがラ
ン事で余の取極ン親



④焼跡に臨時病院を設置

る千五東時患なをは関
こ三百京伝者く開5東
と百人府染を二設1大
が人。下病救百しケ震
出余腸で院護万。所災
来りチ赤を。人昼の時、
た。フ痢開ま余夜救
にフス二設たりの護日
め三千し臨の別所赤



⑤従軍看護婦の追悼記

明中収のま療伝失外先
けで容伝たと染つにの
暮れ治、病揚防棟人感争
た療播室けをを々染で
。とれにの行設が症
介る患病つけいで戦
護船者院た、た命傷
にのを船。治がを以

紀元前の古代ギリシャ時代、医学者ヒポクラテスが著した書には、感染症と思われる記述があります。当時は風土病だと考えられていました。人類は昔から感染症に苦しめられ、特に戦争や災害においては、感染症が直接の死因となる事例が多いことが歴史的に証明されています。

天然痘、ペスト、麻しん、腸チフス、コレラ、マラリア、梅毒、ジフテリア、インフルエンザ、HIV/エイズ、鳥インフルエンザ、エボラ出血熱、そして新型コロナウイルス感染症など。日本赤十字社は罹患者の治療とともに、予防対策にも力を入れてきました。

日赤が最初に感染症の治療と予防に取り組んだのは、前身の博愛社が活動を開始した、西南戦争(1877年)の救護所でした。日赤の歴史は、感染症との闘いと言っても過言ではありません。

注

(1)重症急性性呼吸器症候群、(2)中東呼吸器症候群

※ 本紙作成にあたっては、日本赤十字社HP赤十字WEBミュージアムの画像を抽出して使用しています。またテキストはそのページを参照しています。